

2006年2月の大気大循環と世界の天候

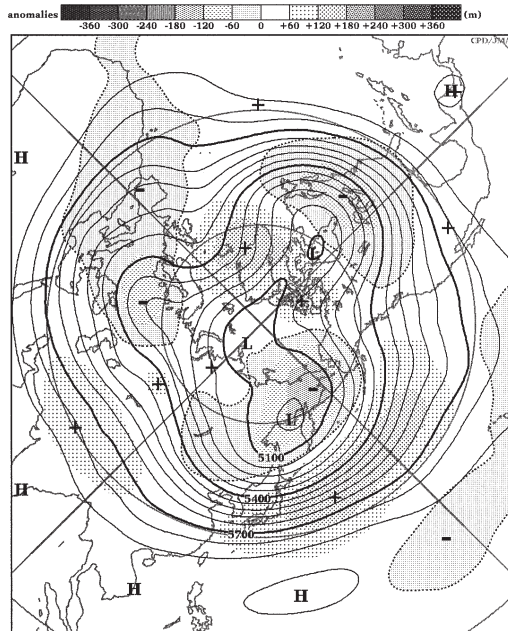
大気大循環

北半球500 hPa 高度では、東シベリア付近とハドソン湾付近に極渦の中心がみられた。また、ロシア西部にも極渦の張り出しがみられた。このため、東シベリア付近と北米北東部では顕著な負偏差となり、ヨーロッパもロシア西部を中心に負偏差に覆われた。一方、グリーンランド付近は顕著な正偏差となった。また、日本付近から太平洋東部では顕著な正偏差がみられた。

熱帯の対流活動は、インド洋東部からインドネシア付近にかけての北半球側で平年より活発だった。一方、南半球側では平年より不活発となり、特にオーストラリア北部で不活発な領域が明瞭にみられた。また、中部太平洋赤道域では平年より不活発で、この傾向は2005年11月以降持続している。

850 hPa 流線関数および風ベクトルでは、太平洋西部から中部にかけては南北両半球に高気圧性循環偏差が分布し、太平洋西部と中部の赤道域では明瞭な東風偏差となった。この傾向は2005年9月以降、6か月間連続している。また、オーストラリアではオーストラリアモンスーンが不活発だったことに対応する明瞭な高気圧性循環偏差がみられた。

SOI (南方振動指数) は+0.1で、ほぼ平年並だった。



2006年2月の北半球月平均500 hPa 高度および平年偏差
等値線間隔は60 m、偏差パターン間隔は60 m、平年値は1979～1993年のECMWF15年再解析データによる。

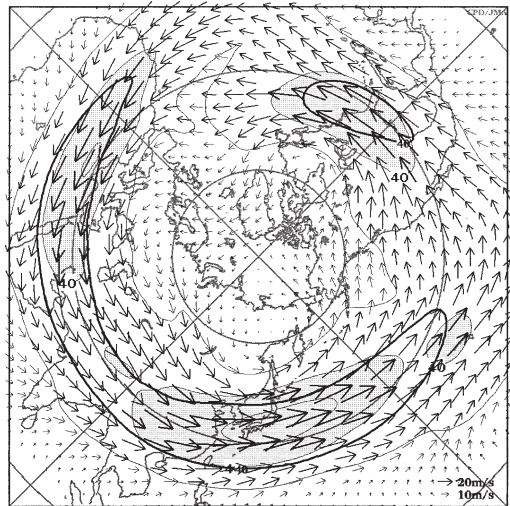
世界の天候

- ① モンゴル西部からカザフスタンの高温・多雨
- ② 中国南西部からインドの高温
- ③ マレー半島からスマトラ島の高温・多雨
- ④ アルジェリア西部からマディラ諸島の多雨
- ⑤ ニジェールの高温
- ⑥ マリからブルキナファソの多雨
- ⑦ 南アフリカの高温
- ⑧ 米国中部の少雨
- ⑨ メキシコの高温
- ⑩ ミクロネシアの高温

【フィリピンレイテ島の大雨】

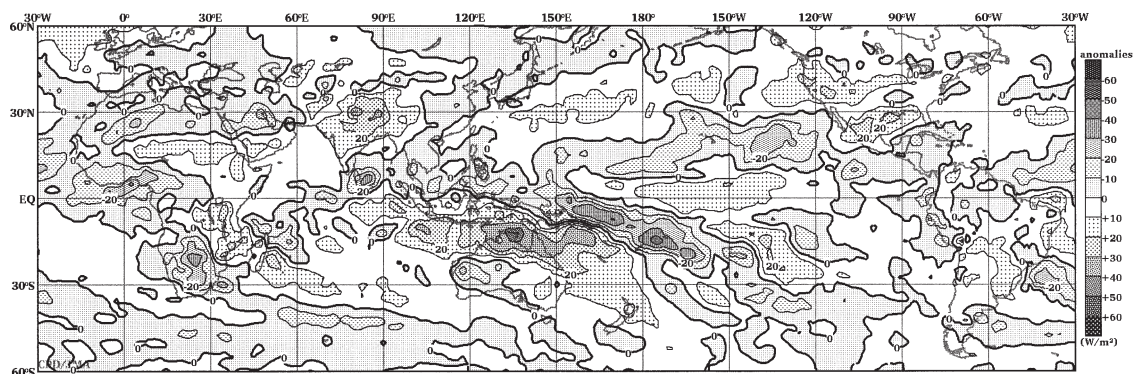
フィリピンのレイテ島で17日、大雨による地すべりが発生し、死者・行方不明あわせて1,000人以上が報じられた。地すべりの発生する数日前に5日間で500 mm前後の大雨が降っており、この大雨の要因として、太平洋からの平年より強い貿易風と大陸からのコールドサージがレイテ島付近で合流して対流活動を強め、その状態が持続したことと、山岳などの地形の影響が考えられる。

(気象庁地球環境・海洋部気候情報課 村上喜章)



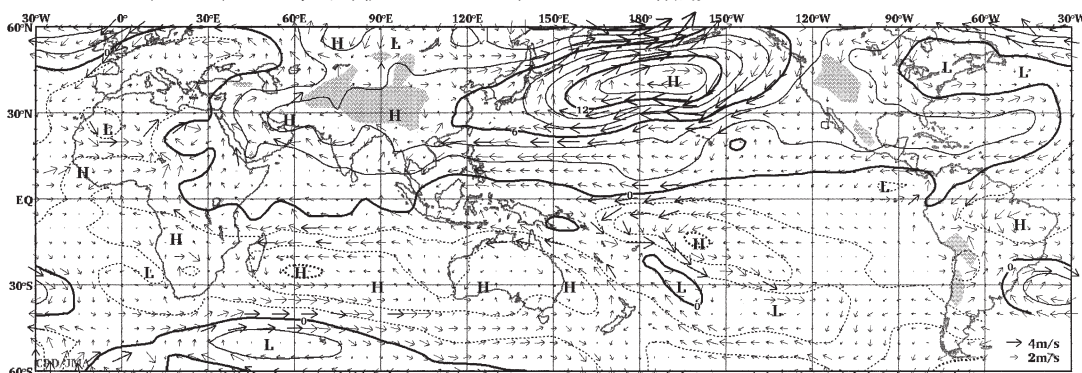
2006年2月の北半球月平均200 hPa 風速および風ベクトル

等値線間隔は20 m/s、陰影部は40 m/s以上、太実線で囲まれた領域は平年の40 m/s以上の領域を示す。平年値は1979～1993年のECMWF15年再解析データによる。



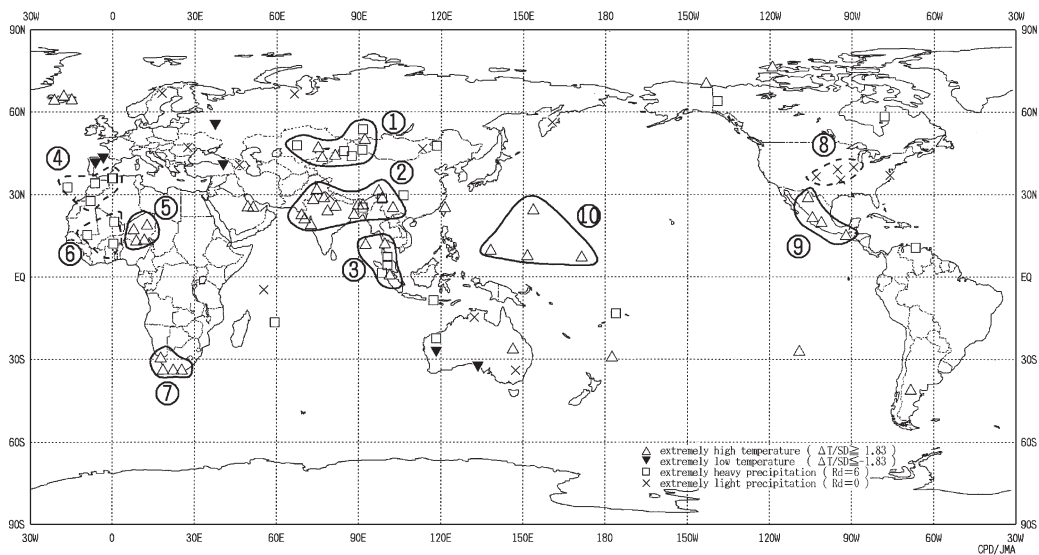
2006年2月の月平均外向き長波放射量年平均偏差

等値線間隔は 10 W/m^2 で、値が小さいほど対流活動が活発であったと推測される。元データは CPC/NCEP/NOAA、平年値は1979~2000年のデータから作成。



2006年2月の月平均850 hPa 流線関数年平均偏差及び風年平均偏差ベクトル

流線関数の偏差の等値線間隔は $2 \times 10^6 \text{ m}^2/\text{s}$ 。平年値は1979~1993年のECMWF15年再解析データによる。



2006年2月の世界の異常天候分布図

△異常高温 ▼異常低温 □異常多雨 ×異常少雨

異常高温・低温は標準偏差の1.83倍以上、異常多雨・少雨は降水5分位値が6および0。図中の番号は本文中の番号と対応している。